

毗

首

羯

磨

III

# 毗首羯磨

## III

都利聿斯經に就いて.....	1
天竺の海 .....	5
◎ 海藏妙室 ◎ 仏爲海船師	
◎ 海渚婆羅門 ◎ 何番目の室	
◎ 牛頭山 ◎ Rāmaの掛橋	
算用算木占(上) .....	30



1988 Nov.

## 都利聿斯經に就いて

都利聿斯經は印度の天文・五行・曆算關係書の漢訳書らしい。唐の貞元(785-804)中に李弥乾という人が西天竺から伝えたものを璩公という者が訳したと云う。一時、数学者の李儼先生が中国算学史(上海・商務印書館・民国26年)の中で、日本の天平18年(746)6月に、この書が日本へ輸入されたとして、貞元以前から此書は中国に存在していたと言う説を立てられた事がある。しかし、これは誤解で、続日本紀の天平18年6月己亥の記事は僧玄昉の死を伝え、彼が唐より帰国(天平7年・735・遣唐使の大使多治比真人広成や吉備眞備などと同船)の際に持ち帰った「經論五千余卷」の中に存在したと考えられたらしい。「新書寫請來法門等目錄」(大正大藏經第55卷。大日本仏教全書第2卷)の最後の部分は仏書以外の都利聿斯經を含む雜書を集め、次文で終っている。

右雜書等、雖非法門、世者所要也。

そして、全編を總括して

大唐咸通六年、從六月迄于十月、於長安城  
右街西明寺、日本留学僧円載法師、求取雜法  
門等、目錄具如右也。

日本貞觀七年十一月十二日

却來左京東寺重勘定、入唐請益僧大法師位  
(割註して)爲後記之。

この目錄の編者は在唐時期や、東寺の關係者で  
あり、その者が大法師であることから宗叡である  
ことに向違いはない。

三代實錄に依ると宗叡は元慶8年3月26日丁亥  
に死亡するが、この條には彼の略歴も記されてい  
る。彼の渡唐は貞觀4年に高岳親王に請從してで  
あった。汴州(南封)から五台山、天台山、長安  
の慈恩寺、青竜寺、興善寺などを廻つて密教の修  
業し、洛陽を経て、貞觀8年(866)明州の望海

鎮から李延孝の船で帰国する。四年向ほどの在唐  
であり、貞觀11年1月27日乙酉には大法師から権  
律師に出世し、死亡時には僧正法印大和尚位にあ  
った。

この目録にみえる数々の書籍は恐らく宗叡に頼  
まれて円載が6月から10月迄の向に集めたものだ  
ろう。この円載は当時30年近くもの唐国浪々のベ  
テランだった。宗叡はそれを手土産にして帰国し  
た訳であった。ところで円載は、それから十一年  
後の唐の乾符4年(877)10月、仏儒の諸典数千  
巻をたずさえて李延年の船で、40年振りに帰国し  
ようとするが、海上で暴風に遭って船頭李延年と  
共に溺死する。続日本後紀の数ヶ所の記事に依る  
と、円載は弟子の仁好などを時々帰国させて恐ら  
く唐の事情などを報告する上表を行い、生活資金  
として日本政府から賜金を受けていて、大袈裟に  
に申せばスパイでもあった。

さて、この都利聿斯とは、何を意味するのであ  
らうか。新唐書藝文志や宋史藝文志にみえる書名  
は、ほぼ次の二種に別けられる。

a. 都利聿斯經      b. 聿利四門經

ところで、都利はトリか、又はツリであり、こ  
れは梵語の *Turiya* ではないか。これは「四つの  
部門より成る」の意味であり、四門經に通ずる。  
次に聿斯はイッスか、ヒッスで、梵語の *Is* に当  
ててみた。この意は「選擇」であり、中国で「選  
擇書」と言うのは、結婚の日時を選んだり、旅立  
ちの方向を決めたり、つまり人間を幸福にする数  
々の好条件を選び出す事が選擇である。つまり都  
利聿斯とは *Turiya-Is* で、選擇四門占經の意味  
ではなからうか。それは占屋術でもあり、時には  
複雑な曆算も必要とするであらう。

# 天竺の海

— 海藏妙宝 —

古く印度の乳海攪拌の伝説に依ると、不断は仲の悪い天の神々と魔界の阿修羅たちが協力して不死の甘露 (Amrita) を作るために摺子木状の Mandara 山を引き抜き、轆轤錐のように、それに長い Vasuki 竜王の体を巻きつけて神・魔協力して海中で攪拌回転したらしく、最終的に Amrita を作ったが、その過程の副産物として一切の宝石類も出来たと云うのである。

Milinda 問経でも「海は真<sup>珠</sup>球、摩尼珠、琉璃、螺<sup>貝</sup>具、宝石、珊瑚、水晶、種々の宝石を集積し、所藏し、秘藏し、外へ散らさない」(第3編、第2章・10・海)。

であり、また Jataka (463 話) の盲目の海師 Suppāraka の航海譚でも、魚網で引き上げられた五海域の海底の宝物は次の如くである。

1. Khura-māla (金剛石) 2. Aggi-mā-  
 la (黄金) 3. Dadhi-māla (白銀) 4. Ni-  
 lavanna Kusa-māla (綠玉) 5. Nala-māla  
 (瑠璃) 6. Valābhamukha

この物語には外の航海譚に現れる島も夜叉女も  
 羅刹も出てこなく、海底の室だけである。最後に、  
 今までこの海に来て帰った船舶は一隻もないと云  
 われる Valābhamukha 海にまぎれ込む。それは巨  
 大な渦潮が、暴潮端 (Tidal Bore。この Bore は  
 中国の錢塘江のものが有名であるが、印度では  
 恒河河口の最西の Hugli River のものが知られ  
 ている) の海であり、Valābhamukha は「南極に  
 ある地獄の入口」らしい。これには強風は伴はな  
 いようである。

大智度論の能施王子の航海譚 (大 25 卷 151a)  
 でも室は海にある。

前生では娑伽陀童王 (Sāgara-nāgaraja 海洋



竜王)の子息であつた能施 *Ṇyāgavat* (能く布施  
まする)王子は、前世の父親の頭上の如意宝珠(  
*Cintamāni* 打出の小槌のように、何時でも、何ん  
でも、無限に望みの物が出て来る)を申し受けた  
いと、五百人の商人と共に、陀舎 *Dāsā* (船頭・  
渡守の意味)を水先案内者として航海に出る。こ  
の陀舎は経験豊かな盲目の海師であるから、前記  
の *Jataka* の *Suppāraka* を思わせる。陀舎は商人達  
を七宝のある海岸に案内して充分に満足せし、別  
れて能施王子と共に小舟で去る。陀舎は自分の寿  
命の尽きたことを知り、死んだら是非遺体は大海  
中の金の沙洲の上に置いて呉れと遺言し、また娑  
伽陀竜王の竜宮へ行く此後の危険と対策を教える。  
能施王子は大風と危険な地形を乗り越えて如意宝  
珠を手にする。

この話も宝物の起原は海であり、航海の障害の  
一つは自然である。

印度洋の航海はサイクロン Cyclone に遭遇することが多かっただろう。Kalikā-vāta (観音經などの黒風はこのサイクロンのように思われる。その外は Divyāvadāna にみえるらしい Bārānasi の大商人 Supriya の Badaradvīpa (宝島) への航海譚 (この航海にも Magha という海師が同行する) の Vairambha-vāta (毘嵐婆の風) の大風がある。この毘嵐婆の風は (仇なす風) の意味らしく、Jataka の第 一 話にもみえ、それでは子鷲が親鷲の忠告を聞かず、昇るべき限度を超えて飛んだのでこの毘嵐婆の風に会って死ぬ。けれどこれは強いモンスーンだろう。

世界各国の海洋志ども左様であるが、印度の航海譚にも吞舟の巨魚が現れる。大智度論卷六 (大 25 卷 107, 108) の魚王摩伽羅 Makara が口を開くと、海水はその口に流れ込み、船は非常な速さで吸込まれてゆく。船頭が櫓の上の見張人に知らせると、

(三)  
彼は三つの太陽がみえ、白い山々が列んでいて、海水が急激にその方に流れ、大きい穴の中に流入しているように見えると言う。それを船頭が解説する。これは摩伽羅が口を開いているので、三つの太陽はその両眼と実際の太陽であり、白い山々は摩伽羅の歯並である。海水は摩伽羅の口に向かって流れ込んでおり、もう助からないと言う。

またMilinda王問經(第三編・第二章・五・船)の「ティミ・ティミンガラ・マカラ(Timi-timingala, Makāra)の魚群の棲処たる広い海」にみえる Timi-timingala も巨大な巨大な魚である。吞舟の魚を吞む大魚を吞む巨魚は Timi-timingala-ga-lā だそうである。

また Sidā 海と云うのがあつたが、Sidā 海はその弱水の海である。水に浮く孔雀の羽も沈む程に軽い海水なので、船は浮ぶことが出来ず沈み、渡海出来ない海域で、Si-

daは沈没の意味である。(Jataka VI. 125)。

—— 仏爲海船師 ——

これ迄にも幾人かの秀れた海師をあげてきた。賢人と言われた Supparaka, 能施王子に同伴した陀舎, 商人 Supriya の宝島への航海を指導した Mangha 長者などがあつたが, 華嚴經にも南方の港町「樓閣 Prāsada?」に住する大評判の海師「自在」(實叉難陀の新訳では婆施羅ぞ、Vairocana と復原されるが、何人ともなくスツキリしない) があり、彼は語らいの中で、海師の知つておかかばならない知識に就いて次の如く言う。

(A) 我知海中一切宝洲、一切宝相、一切生宝、一切淨宝及不淨宝。知一切宝價、一切宝器。知一切宝隨所応用。知作一切宝。知一切宝境界。知一切宝光明。

(B) 知一切竜宮殿、滅一切竜難。知一切羅刹宮殿、滅一切羅刹難。知一切大身衆生宮殿、滅一

切大身衆生難。

(C) 知趣知捨回瀆恐怖、能離波浪。知相水色。知日月星宿。知諸算數。知晝知夜。知刹那・羅婆・摩睺(多)・姤路。知去知住安危之法。知海船舶穿不穿法。明候風相、而迴轉之。了所至處。

(A) は海藏室珠に関する一切の知識、産地、品質、値段、細工などの知識である。

(B) では採宝に、ややともすれば暴害する竜、羅刹(Rākṣasa, 新訳では夜叉Yakṣa)、大身衆生(Mahā-kāya-sattva 化生の者。新訳は部多Bhūtaで化生の者である)などの事情への配慮である。

(C) では波浪の性質、海水の色、日月星辰の知識に計算、夜と昼と時刻の刹那(Kṣaṇa)羅婆(Lava)摩睺多(Muḥūrta)姤路(Ahoratra)である。新訳では「晷漏延促」の四文字だけで素気なり。玄奘訳の大毘婆沙論(大)27巻 )に

よると、

1 恒刹那 (Itakṣana) = 120 刹那 (Kṣana)

1 臘縛 (Lava) = 60 恒刹那

1 牟呼栗多 (Muhūrta) = 30 臘縛

1 晝夜 (Ahorātra) = 30 牟呼栗多

その外、海用船舶自体の牢脆さ、風候気象など、新訳には他に「機関漚滑」がある。これは帆を巻上げる滑車とか、錨を巻上げる装置の漚滑だろうか。

以上は後世の海師教典 (Nāvika-sūtra, パーリ語の Niyyāmakā-sutta) の原泉だろう。(よく分らないが、左様な文字が辞典にみえるから、海師教典が存在するのだろう。)

—— 海濟婆羅門 ——

Jatakaの196話では、Tambapanni島 (錫蘭島) に Sirisavattṭhu という夜叉の町があって、大勢の

夜叉女 Yakkhini が住んでいた。其處にはよく難破船が漂着するらしく、初めの難破船の商人達が流れ着くと、この女達は最大級のもてなしと媚態で彼等を楽ませるが、次ぎの新しい船がくると、前の船の商人達は牢屋につながれ、次々に夜叉女の餌食となつてゆく。この Tambapanni の夜叉女達は最初の錫蘭王となった毘闍耶 Vijaya に亡されるが(大史七章)。

海路の話ではないが、面白いのは Jakata 54 話の隊商通過経路の人間(部多の類ではあるまいか)の村の話である。この村の人間はマンゴー—Amba の木そつくりの果樹を植えている。その外観はどこから見てもマンゴーである。しかし、それは猛毒果で食べたが最後 Halāhala (致命的な毒らしいが、どんなものか分らない)の毒を服んだと同じように確実に死んで了う。中村元先生の「仏教植物散策」の菴羅(マンゴー)の項にも見える事だ

が、印度の人の愛好は大變なものらしく、この村を通過する隊商はどの隊商もマンゴーの誘惑に敗けて、この毒果を食べて全滅する。そこで村人は何處からともなく現れて、隊商の残した全遺品をホクホク顔で分配する仕掛である。

それでも印度人は富を求めて旅へ行つた。

昔日の舍衛城 *Sāvatti* は四方から隊商の集まる商業の一大中心地であつた。何々は有るかと問われて、總べて有る (*Sabbam attfi*) と答えた舍衛商人の氣構えから *Sāvatti* の市名が生れたと云う一説のある位に殷賑を極めた大都市であつた。またこの市の住民七俱脛の中、五俱脛は仏教信者だつたと言う仏教都市でもあつた。俱脛 *Koṭṭi* は一千万であるから、人口七千万人は少し大袈裟のようにも思われるが、七人中五人が仏教徒だつた位に考えておこつ。従つて商人の中から仏僧となる人も多く、仏教史料の中に名を残す人も多い。



赤沼智善先生の印度仏教固有名詞辞典より商人  
経験の舍衛生れの比丘を集めてみた。

Godatta は舍衛城の人で、隊商主の家に生れ、  
父の死後も五百台の車輛を率いて往來したが、車  
を牽引する牛が疲労して倒れるのを見て、感ずる  
ところあり出家す (Ihera)

Rājadatta も舍衛城の隊商主で、五百台の車に  
商品を積んで王舍城 Rājagaha に行商し、美しい  
娼婦に夢中にあつて全財産を無し、無情を感じて  
出家した (Ihera)

また舍衛城人の出家で、海商の経験ある者に次  
がある。

Samudra は舍衛城の長者が、妻と共に大海を渡  
り、その航海中に生れた児なので Samudra (海)  
と名付けた。父が賊に殺されたことで出家する。

(Divy)

もう一人の Samudra。彼も舍衛城の商主の子と

して生れ、長じて海に入り、黒鼠 Kalika-vala  
に逢い難船せんとしたが、仏を念じて助かり、帰  
國して出家する (Avadānaś

また Saṅgharekkhita も舍衛城の長者 Buddhara-  
kkhita の息子であるが、年少の頃は仏弟舍利弗 Sā-  
riputta の弟子になるように父親に連れられたが、  
長じて多くの商人と共に海に行き、帰って仏陀に  
よって出家する (Divy

— 何番目の宝 —

Punna (円満) 師は古い海港 Supparaka (東経 73.0  
北緯 19.2) の産であるが、隊商として舍衛城之來  
ていて入信した一人である。彼はこの海港の長者  
自在 (Īśvara 或は Bhava) の息子であった。こ  
の長者には正妻 2 子として、安樂 Bhavila, 守護  
Bhavatrāta, 歡喜 Bhavenanda の三子があつた  
が、この妻子は長者が病に臥した時に少しも顧み

す、一婢女が長者をよく看病したことから、彼女を側妻として円満を儲けたのである。

円満は若い時から商才があつたらしく、他の三兄弟が航海に出て、各々十萬金を得て帰ってきたが、その間に彼は Suppāraka に居ながら、その倍額を儲けたと云う。

長者が死ぬと何んの遺産の分配にも与らず追出された彼は、海岸に打ち寄せられた流木を集めて薪として賣つて生活する少年と知合となり、商品に目の利く彼は少年が集めた薪の中に超貴重な牛頭栴檀を発見する。取り敢えず五百錢で譲り受け、この牛頭栴檀を四分した鋸屑を市場で賣つたところ一千錢を得たので少年と二分する。

その頃、Suppāraka 港を支配していた輸波鞞迦 (Sunāparantaka) 國王が熱病を患い苦しんでいた。医者の見立てでは牛頭栴檀末を身に塗つたら宜しかろうとの事であつた。早急に牛頭栴檀を入

手するやうに命じられた大臣は円満の處えやつて来て、すぐに牛頭梅檀が人用なのだ、汝今持っているか。円満は答えた。少々御座います。價は幾らか。千錢で御座ります。大臣は價を与え、檀末少々を得え、王のもとえ走り帰って王の身に摺込むと、やゝあつて王の病は癒えたと言う。

円満はこの牛頭梅檀の流木を小賣りにして資金を作り、渡海貿易に乗出し豪商となる。彼は七度渡海したと言われ、港 Suppāraka の一流の海師でもあつたらう。最後の航海の時に出合った舍衛城の商人達が仏經文を誦和して居るのを聞いて感あり、全財産を兄弟に譲り、舍衛城に赴き出家する。

円満はわかがわ兄達に渡海商賣は危険なので行かないやうに忠告していたが、稔り多い航海への誘惑に負けて海へ出る。ところが、わかかの暴風に会い、船は風に吹きまくられ、一海岸に吹き寄せられた。ところが、その島は牛頭梅檀の林だつ

た。商人達は飛んで喜んで伐採した。それを見廻り藁叉の作喜(?)が祭見し、地主の大自然(Maheśvara) 藁叉に報告すると彼は激怒し、黒風を起して商人達を遭難死させんとする。嵐が初まると商人達は恐れ戦き「南無聖者円満、南無聖者円満」と助けを求めた。その有様を見ていた天女(恐らく、この天女はJatakaの中によく出てくる船人を助ける Manimekhalā (宝帯)であろうか)がそれを円満に知らせる。その頃、円満は阿羅漢と成っていて、色々な術が使えた。藁叉達は幾ら黒風を吹きまくっても商人達を撃殺する事が出来ないので、如何してかを見ると、商船の見張り櫓の上で円満和尚が座って祈っていた。(有部藁事卷三

① 24-12.13. 其他)

この円満師の事はさておき、この話で興味深いのは夜叉と牛頭栴檀との関係である。富の神、利賤の神 Kuvera (毘沙門天)の部下である夜叉であって

みれば、この怒りは隠された室を小出にして人向供に発見させる Kuvera の通常の意図ではなく、人向が勝手に神域に進入して強盗を働いたと言う訳からでもあるうか。

また夜叉と牛頭梅檀の関係では賢愚経卷六 (大 IV-388a) の釈迦の高弟の一人舍利弗 Śāriputra の葬の條で、帝釈は夜叉供に火葬用の薪 (Citaka) に用いる牛頭梅檀を取ってくるように命ずる。すなはち、

時天帝釈、勅諾夜叉、往大海边、取牛頭梅檀、夜叉受教、夺取来還、積爲大積、安身在上、酥以灌、放火耶旬。

これよりも、もっと積極的な資料は大乗悲分陀利経卷二 (大 III-246) の次文だろう。

毘沙門大王曰、諾賢善聽、汝等樂求菩提者、樂求福德者、日日可往海彼岸、取海此岸牛頭梅檀香末、給海濟婆羅門、爲如來設食并比丘僧。

九万二千夜又同声唱言、我等大士、於此七年、  
当取海此岸牛頭栴檀香来、以給海渚婆羅門。

また同じことを悲華經卷 = (大) III-178, 180) には  
次の如く見える。

諦聽欲得福德及善根者、便可日日渡於大海、爲  
彼梵志取牛頭栴檀及以沈水、熟食飯仏及比丘僧。

時有九万二千夜又同時発言、天王我等今者於七  
歳中、常当取是牛頭栴檀及以沈水、与彼梵志、熟  
食飯仏及比丘僧。

この大乘悲分陀利經の「日日可往海彼岸」は悲  
華經の「日日渡於大海」に相当するが、これには  
堅苦しい彼岸 Pāra, 此岸 Apāra の思想的意味はま  
ったく無くて、「海此岸牛頭栴檀」は法華經・葉王  
菩薩本事品 (大) IX-536) の「海此岸栴檀」と同  
じく、閻浮提 (印度) 内での唯一の牛頭栴檀の産  
地 Malaya のものと同植物品種だろう。Malaya  
山にも常に海岸添いであることが強調される。す

なほち。

大海畔摩羅耶山 (入楞伽經<sup>⊕</sup>XVI-514c)

大海浜摩羅耶山 (大乘入楞伽經<sup>⊕</sup>XVI-587b)

南浜海有秣刺耶山 (西域記<sup>⊕</sup>LI-932a)

の如くである。それは牛頭栴檀を宝珠に近ずけ、  
海に近ずける第一歩であり、華嚴經の香水海の海底質の牛頭栴檀や、羅摩伽經上(⊕X-854c)の

牛頭栴檀末、爲底泥

の完全<sup>全</sup>に牛頭栴檀は「海藏珍室」の仲間入りをする。

また Malaya 山を離垢山と訳したものがある。  
それは旧訳の大方広仏華嚴經であり、

善男子、復有香、名牛頭栴檀、從離垢山王生、  
若以塗身火不能燒。(⊕IX-713b)

唐の新款には見えな<sup>い</sup>。Mala は垢であるが、  
Malaya が離垢、除垢となるのが分らない。Vimala  
ならば離垢であろうが、これは次にみるように、



恐らくTamil系の言葉や梵語で解しようとしたの  
だろう。或いは南印度のTamil人に崇拜されるAga-  
stya Malai (アガステイヤ山の山。菅沼晃編、イ  
ンド神話伝説辞典、アガステイヤの項 5下) のMa-  
lai に連がって、Malaya は「山地」の意味かも知  
れない。また井原徹山著「印度教」の人種と語  
族の(三の甲のロ)の項に、

マラヤーラム (Malayā lam) 語 (約九百万人)。  
マラヤーラムとは元来「山岳地方」の意味を有し、  
タミル語の西方、マラバル海岸地方に行はれ、九  
世紀頃タミル語から分派したもので(中略)印度  
教の文献にも此語のものがある。

と見える。

### —— 牛頭山 ——

ところで、この牛頭とは何にを意味するのであ  
ろうか、何んとなくMalaya山の姿が牛頭に似てい

るからと言うようであるが、具体的な証拠は何んにもない。ただ正法念處經六十九卷に

從順彌山至此高山(中略)有五峯。第一金峯(中略)第二銀峯。銀樹具足。峯中多有牛頭栴檀。若諸天衆。與阿修羅共鬪戰時。爲刀所傷。以此牛頭栴檀。塗之即愈。以此山峯。狀似牛頭。於此峯中。生栴檀樹。故名牛頭(大)XVII-409c)

と云う話があるが、これにBhāgavata-purānaには見えるらしい風神Vāyuと婆蘇枳竜王(Vāsuki)との力比べの傳説を重ねてみると面白い。順彌山系の一峯Triakūtaparvata(三頂山)がVāyu神によって折り取られ南海の中に投げられて出来たのがLankā(セイロン島)だと云うのである。正法念處經の牛頭狀の銀峯が、この三頂山だとすれば、Malaya山が牛頭狀で牛頭栴檀の産地であることも考えられないこともない。Rāmāyana物語のLankaは三嶺(Trikūta)山の頂にある毘首羯磨の作

つた羅刹の都市だったが、羅刹が追放され空城と  
な<sup>り</sup>~~ったが~~、後に富の神「毘沙門天」(Vaiśravaṇa)  
の居城となった。

一方、中国方面では、一体「牛頭」とは、どん  
な形の山かという考証が行われたように思われる。  
その発端は北印度人仏徒跋陀羅の訳した「大方広  
仏華嚴經の

迦夷國土有菩薩住處、名牛頭山、過去諸菩薩常  
於中止 (天 IX-590a)

であるが、この華嚴經の新訳では訳者が于闐人(  
Khotan)らしく具体的に

疏勒國(Kashgar)有一住處、名牛頭山、從昔  
已來、諸菩薩衆、於中止住 (天 X-854c)

となっている。以後中国の華嚴家によって考証が  
続けられる。次の如くである。

復以閻浮提内于闐國中水河岸上牛頭山辺、近河  
岸側、罽磨婆羅喬大聖人支提住處 (隋・那連提耶

舎訳・大方等大集經・(大)XIII-294b)

今但潤州(江蘇省丹徒縣)江南、有牛頭山、彼中現有仏窟寺也(唐・法藏・華嚴經探玄記・(大)XXXV-391c)

然牛頭山、在今于闐國、此云地乳、仏滅百年方立此國(中略)指江表牛頭(唐・澄觀・華嚴經疏・(大)XXXV-860c)

至罽室餒伽(Gosringa)山、唐言牛角山(中略)或指江表牛頭者、即金陵南四十里、有山名牛頭、謂由此山有雙峰、故一名雙闕、一名天闕(唐・澄觀・大方広仏華嚴經隨疏演義鈔・(大)XXXV-604a)

最後の澄觀の演義鈔の記事の中には唐・李吉甫の元和郡県志の記事と符合する所が多く、この書が参照されたに違いないが、牛頭山とは一山雙峰の山と云うのが結論だったろう。

—— Ramaの樹橋 ——

Mahātittḥa の港 (大海口城・現名 Mantata・東経 79.9, 北緯 9.1) の近くから、現名の Adam's Bridge の岩礁の配列が対岸の南印度の本土まで約 120 km もつづく。これは又 Rāma の橋とも呼ばれる。Rāmāyana 物語に依ると、Rāma 王子の妻 Sītā が Laṅka (Sri Lanka) の羅刹王 Rāvana に拉致されると、Rāma は彼女を助けんものと、猿王 Sugrīva の援助を受けて Laṅka へと進軍する。しかし Laṅka の対岸に達した時、向の海が荒れ狂って渡海出来なかった。そこで猿の將軍 Nara が、海神の力もかり、猿軍を指揮して渡橋を建設する。それがこの Rāma-Setubandhe (ラーマの橋) であると言う。

この Rāma の橋は干潮時には、ほとんど干上がってうらしく、従って Mahātittḥa から北印度への直接航行には適さないう港のようであり、大史に見える Mahātittḥa 港に関する四件の記事は総

べてが、対岸の南印度 Tamil との交通である。

北印度の Lāla 国から追放された Vijaya 王子は七百人の従者と共に Lanka へやって来て、最初の Lanka 王となったが、その相手をするのは夜叉女達だった。その内に王初め臣下達も正しい血統の人間の妻がほしくなり、この港から多くの高価な贈物を持たせて使者を Tamil の Madhura の都の Pandu 王に遣わした。そして自分には王の娘を、臣下には適当な女を推選願いたいと希望した。そこで Madhura の都では希望する女達の大募集が行われ、大勢の選ばれた女達が、この Mahātittāha から Lanka へ上陸して来た。以後 Tamil の野心家達が、この港からしばしば上陸して来たようだし、また一時没落した国王が、この港から逆に Tamil の地へ亡命して行った。

それに対して Jambukola の港からは国王即位早々の天愛帝須 Devānampiyatissa が華子城の Asoka

王之使者を派遣して敬意を表したり、Asoka王の好意で贈られた、例のUruvilvā村のNairanjna河畔の大菩提樹の南枝がLankaに上陸したのも、この港からであった。唯だ怨むらくは北Lankaに違いないJambukola港の位置が不明な事である。

# 算用算木占 (上)

## A

昨秋、下平和夫先生から御所藏の古写本「玉泉之算」の影写冊子(23葉表裏)を頂いた。それには珍らしく縦型の算用算木数字Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅷが使われていることも注記されていた。大変興味を感じ、右考左考してみたものの、まだウダツの上らな<sup>い</sup>状態である。

この写本には二つの年紀があり、その一つ(第22葉裏)は「慶長十五庚戌閏二月十七日、阿州播東郡大谷下之坊写之」である。この阿波國播東郡は現在の徳島県名東郡<sup>イヨウ</sup>であらうし、大谷は今は徳島市に編入されている大谷所であるらしい。

また年紀のその二(第23葉裏)は、この写本に補遺の二三文を加えて再び「元和九年五月廿六日」の年紀がある。

「玉泉流之算云」として始まる序文(第1葉表)

には

天威地応

諸仏参集

我諸衆生



陰陽本師	竜樹菩薩	寰際納受
南無憐命	頂礼天地	(中略)
九頭竜王	提婆菩薩	馬鳴菩薩
竜樹菩薩	助我陰陽	(下略)

とあり、この陰陽の本師と称えられる竜樹(Nāgarjuna)は南印度出身の仏教界最大の思想家であり、また大妻をマル子人間で、各方面に業績を挙げた学僧でもあって、数人の竜樹も考えられている程の人物である。日本国見在書目の五行・医方の部にも漢訳著書がみえ、五行の項には

竜樹菩薩五明論秘要隱法 竜樹出印法

がある。また提婆(Ariya Deva)は竜樹の弟子であり、馬鳴(Aśvaghoṣha)は北印度の出で大乘仏教の発展には大きい役割をはたした比丘であった。であるとすれば前記文中の陰陽本師や助我陰陽はこの「玉泉流之算」に印度ト占術の影響があるかのようにも一応は考えられた。その外にも、この写本には仏典による説話や大乘仏教に出現する諸仏や神仏混淆の諸神名も数多く現れ、この写

本の撰者は無論日本の僧侶で、恐らく密教、その中でも東寺密教系の人物ではと考えられた。

しかし、今迄の考察では、この写本の占法には印度占法の影響はないようであり、中国占法に終始しているように思われる。

### B.

「易経」を讀んだだけでは、六十四卦を選び出す方法などは分らない。筮竹を数えて導き出す方法は書いてない。この写本も同様に方法はほとんど分らない。唯だ一ヶ所だけ占法を漏して呉れる處があつた。それは慶長年紀後に附加された「実死実生算」(第23葉裏)である。

それは病氣を煩つた月と日、それにその病人の年令に依つて、その人の生死を占う方法である。

それは煩い付いた曆月と曆日を各々三相倍し、年令を三相倍したものに加え、それを九で割つた剰余を求めろ。この勘定では三の倍数を九で割るのであるから、剰余は三と六と割切れる場合の最後の九を残した九である。これに対するこの写本

の占文も次の如くである。

川ハ是大吉ナリ。 丁ハ是半吉、祈念=カ、  
ルベシ。 卍ハ是悪キ算ナリ。

この算法には例題も付加されていて、病人の年令  
は廿九歳、発病は五月の廿六日であつて、

$$5(\text{月}) \times 3 = 15 \quad 26(\text{日}) \times 3 = 78$$

$$29(\text{歳}) \times 3 = 87$$

$$15 + 78 + 87 = 180 \quad 180 \div 9 = 20 \text{ と余 } 0$$

すなはち、川で大吉。改復疑いなしである。この算  
法も中国風で、二百十を九で割つて剰余を求める  
のに九九が用いられる。印度算法と言われる、よ  
り簡単な九去法を用いた様子は認められな。丁  
度周易で莖竹を四本、或いは八本づつ繰つて、剰  
余の一、二、三、四、五、六、七、八本に依つて  
八卦を決定するなどの方法と同じである。

く

前例で扱つた発病月日や患者の年令の如く計算  
の最初に入れる条件を假に「算入子」と名付ける  
こととするが、この写本には、この算入子に關す

る項目が多いようである。先ず最初の項目「五目録次第」(第2葉表)は次の如くである。(a),(b)は筆者の説明の便宜上付加した。

(a) 甲<sub>九ツ</sub> 乙<sub>八ツ</sub> 丙<sub>七ツ</sub> 丁<sub>六ツ</sub> 戊<sub>五ツ</sub>  
己<sub>九ツ</sub> 庚<sub>八ツ</sub> 辛<sub>七ツ</sub> 壬<sub>六ツ</sub> 癸<sub>五ツ</sub>

(b) 子<sub>九ツ</sub> 丑<sub>八ツ</sub> 寅<sub>七ツ</sub> 卯<sub>六ツ</sub> 辰<sub>五ツ</sub> 巳<sub>四ツ</sub>  
午<sub>九ツ</sub> 未<sub>八ツ</sub> 申<sub>七ツ</sub> 酉<sub>六ツ</sub> 戌<sub>五ツ</sub> 亥<sub>四ツ</sub>

十二空 其時 歳数 取合。

(b)は近世江戸時代は「お八ツ」とか「暮れ六ツ」と呼んでいた時刻呼称と同じである。延喜式・卷十六・陰陽寮の諸時撃鼓に

子午各九<sup>クガス</sup>下、丑未八下、寅申七下、卯酉六下、辰戌五下、己亥四下、並平声、鐘依刻数。

以上の如く、延喜式の成立した時(延長5年・927)には、まだ「子、午には各々鼓を九ツ打つ」の如くで、「九ツ」はまだ時刻名ではなかった。

この鼓数の決定は易数に依ると言われる。周易では奇数は陽数であり、偶数は陰数である。十に

満たない陽数の和 ( $1+3+5=9$ ) を陽爻(——)の數、次に陰数の和 ( $2+4=6$ ) を陰爻(— —)の數とする。六十四卦は各々六爻からなっているが、算用算木には陰爻はないから、陽爻が六本列んだ乾の卦だけである。

乾卦 呼称

——	上九	$6 \times 9 = 54$	4ツ (己・亥刻)
——	九五	$5 \times 9 = 45$	5ツ (辰・戌刻)
——	九四	$4 \times 9 = 36$	6ツ (卯・酉刻)
——	九三	$3 \times 9 = 27$	7ツ (寅・申刻)
——	九二	$2 \times 9 = 18$	8ツ (丑・未刻)
——	初九	$1 \times 9 = 9$	9ツ (子・午刻)

以上の如く、呼称の二数字を掛合せ、その積の十位の部分を消して、一位の数を時鼓の數としたと言っているのである。またこの写本では、十二支の呼称は時刻ばかりではなく十二支年にも適用されるとする。このことは「扇算之事、曲算ナリ」(21葉表)の項にも「子年ナラバ子九ツト入之、皆其ノ如ク心ヘベキナリ。」と見える。

次に(a)の十干であるが、この十干も古くから時刻表示に用いられてきた。中国では南北朝以前

から甲夜、乙夜、丙夜、丁夜、戊夜の呼称があつたが、後代には一更、二更、三更、四更、五更と呼びられた。恐らく理念としてはユダヤやアラビアなどのSemiticの世界の曆と同じように日没より一日を始め、一日を十等分したのであろうか。しかし次第に四季の晝夜の長さの不等を表現出来る漏刻の発達は不定時法を制度として可能にした。

しかし、筆者無知にして分らないのは、各更の更鼓の打数である。

	甲夜	乙夜	丙夜	丁夜	戊夜
(c)	一ツ	ニツ	三ツ	四ツ	五ツ
(d)	九ツ	ハツ	セツ	六ツ	五ツ

(c)のように甲夜を一ツとして、ニツ、三ツ、四ツ、五ツと増していったのだろうか。或いはこの写本の十干(d)のように、十二支の場合を真似かて、甲夜を九ツとして、ハツ、セツ、六ツ、五ツと減じてゆくのだろうか。晉書鄧攸伝は

吳人歌之曰、紉如打五鼓、雞鳴天欲曙。

で、これは確實に戊夜は打五鼓であつたことを示

すが、戊夜はc, d共に五ツで、何れが實際か判断出来ない。しかしこれは写本とは関係ない事かも知れない。

D.

次の項目は「松次第」(第2葉表)である。

宮 余 破

九厄	四十五	ト	松宮	I	ヲ	上	ル
八難	三十六	ト	松宮	III			
七陽	二十八	ト	松宮	III			
六宮	二十一	ト	松宮	II	ヲ	上	ル
五鬼	十五	ト	松	T		上	ル
四斂	十	ト	松宮	IIII	ヲ	上	ル
三生	六	ト	松宮	=	四斂	ヲ	ト

以上と、(第21葉裏)の「一右左=有ルカ無キカ占事」の一徳、二義を加えて作った次表を比較してみると、

	宮	累和	差(宮)	宮
十	55			
九厄	45		-10 (10-9=1)	I
八難	36		-9	III
七陽	28		-8	III
六宮	21		-7	II
			-6	T

五鬼	15	- 5	
四斂	10	- 4	
三生	6	- 3	
二義	3	- 2	
一德	1	- 1	
零	0		

「払」とは引算をすることである。またこの体系の数は1から9迄で、10になると前に「実死実生算」でみたように、9で割って剰余を求め(10-9=1)として1にしてるのである。

ところで徐岳の数術記遺の「九宮」は洛書の魔法陣である。甄鸞は注して、

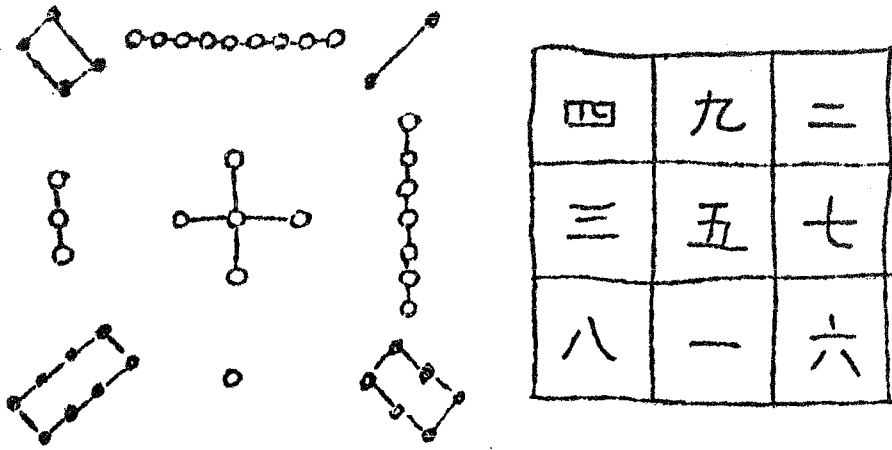
九宮者、即二四爲肩、六八爲足、左三右七、戴九履一、五居中央。

と言ひ、唐の王希明の太乙金鏡式経にも

九宮之義、法以靈龜、以二四爲肩、六八爲足、左三右七、戴九履一、此爲不易之道也。

とある。しかし禹の治水の時に洛水に現れた神龜の背の上にあつたと言ふ洛書の伝説の中には「九宮」





洛書之図

は現れない。この魔法陣は古代中国の皇帝が天帝や皇靈を祭り、政治を行つたと云う「明堂」の制度の中にも密かに存在したようであり、この「玉泉流之算」の「宮」も、この明堂から来たように思われ、この明堂九宮も併せ考えておく必要がある。洛書は文字だけで魔法陣図はなく、文字は六十五字だつたとも、三十八字とも、また二十字とも伝えられる。二十文字は

戴九履一　　左三右七  
 二四爲肩　　六八爲足  
 而五居中

とされる。

爻	瘧	落
		丁
三爻	五息	一爻

因みに、この洛書の魔法陣は  
 我國では、ニ中歴や簾中抄に  
 見えることはよく知られてい  
 るが、本写本と同じ算木数字  
 の魔法陣が「運歩色葉集」の  
 遠(ヲ)部の落瘧爻(ヲコリ  
 ヲ落ス爻)の所に載っている。  
 それは図の如く下部にオ爻を

下す場所、順序が説明されているが抄略した。

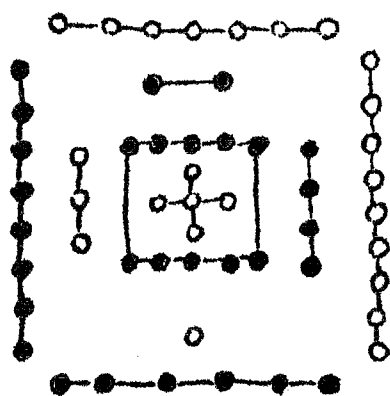
本写本の次の項目は「破算ヲ立ル次第」(第2  
 葉裏)であつて次表を載せている。

	丁	ハ破		ヲ立ル
		ハ破		ヲ立ル
		ハ破	丁	ヲ立ル
		ハ破		ヲ立ル
	息	ハ破		ヲ立ル

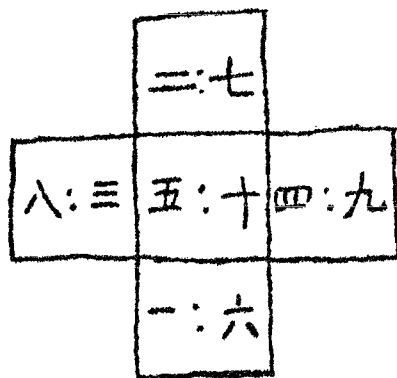
以上を次表の如く書改めると

1:	6	ハ破	9	+4	(9+4-10=3)
2:	7	ハ破	3	+3	
3:	8	ハ破	6	+2	
4:	9	ハ破	8	+1	
5:	10	ハ破	9		

これは伏羲の時に黄河に現れた竜馬の背中にある旋毛の形を写したものと云う、所謂「河図」の数である。洛書の極数が九であったのに対して、河図の極数は十であるから、 $(9 + 4 - 10 = 3)$ が成立する。この「三ヲ立ル」とされる三(九)などは破の場合の入算子と思われる。



河図



陰と陽の数を一つづつ組合せ、一から十までの数を重複なく総べて含ませる数系には二つあり、その一つは周易繫辭上傳第九章の

天一地二，天三地四，天五地六，天七地八，

天九地十，天数五，地数五，五位相得，而各有合。

である。この天数は陽(奇)数であり、地数は陰(偶)数である。そしてもう一つの数系は前記の河

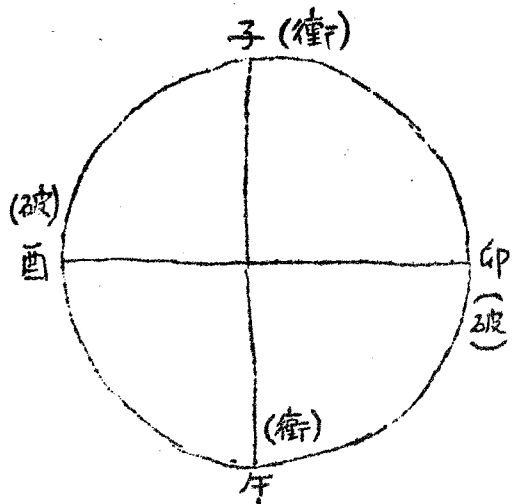
図の数で、それらを表示すると次の如し。

繫辞	河図
1 : 2	1 : 6
3 : 4	2 : 7
5 : 6	3 : 8
7 : 8	4 : 9
9 : 10	5 : 10

そして「松次第」で取扱われたのは繫辞の数系であり、「破算ヲ立ル次第」で取扱われるのは河図の数系であるように思われる。

「破」と云うのは、選擇書で言う破とは、子供頃、天文学に始めて接した頃、知った外惑星の運動での衝とか、上矩、下矩、この矩に相当するのが「破」である。

十二支の相對する支を衝と言ひ、その二支の真中間の支を破と言ふ。圖に於て相對する



子午は衝であり、中間の卯酉は破である。また逆に卯酉を衝とすれば子午は破である。(乾隆帝敕撰協記辨方書など)

この写本の「破算ヲ立ル次第」の場合も、1:6, 2:7などの如く、その差は5であり、極数は10であるから、正しく破である。

また第22葉表の「屋敷之算 = 可用」の中の  
入算子?

Ⅰ, 丁	住吉大明神	9
Ⅱ, 丙	春日大明神	3
Ⅲ, 乙	伊勢大神	6
Ⅳ, 甲	八幡大菩薩	8
Ⅴ, 癸	土公, 竈神, 荒神	9
Ⅰ, 丁	釈迦文殊菩薩	9
Ⅱ, 丙	觀音大菩薩	3
Ⅲ, 乙	藥師如來	6
Ⅳ, 甲	阿彌陀如來	8
Ⅴ, 癸	大日地藏菩薩	9

は破の場合で、右端の数字は「破算ヲ立ル次第」  
にみえる入算子らしいものを付記した。と申し  
ても具体的に宮、余、破の真相は分らない。これ  
等は數に違ひないのであろうが、五行と同じよう  
に相尅、相生、相加が互の間に成立するようであ  
る。五行ならば、木生火、火生土、土生金、金生  
水、水生木などは簡単な自然現象として考えられ  
るが、數値の間で、どうして相尅などが可能なの  
だらう。思付く事は數の大小、陰陽、間隔なので  
あるが、その真相は全く分らない。それでも(第  
十六葉裏)に見えるように

宮余相尅、余破相生-----

宮余相生、余破相尅-----

宮余破相尅-----

宮余破相生-----

宮余相加、余破相生-----

宮余相加、余破相尅-----

のもとで病氣、失物、船乘出行、夢などの占文が  
續いている。

三

次の項目は「四季ヲ知ル次第」(第2葉裏)である。こゝには王、相、死、囚、老の五要素が現れる。それぞれの定義は後文中(第16葉表)に次の如く記されている。

王ハ一天、主、自身不得動……

相 是レ百宮臣、物ノ毎ニ弁受用……

死ハ是未来客、豈可得後秀ル事ヲ云ナリ。

囚ハ是罪ノ輩、何、日カ得ニ放行。

老ハは無□寿□□□□……

この五要素は四季と土用によつて、五行配分を異にする。

	王	相	死	囚	老
春	木	火	土	金	水
夏	火	土	金	水	木
土用	土	金	水	木	火
秋	金	水	木	火	土
冬	水	木	火	土	金

また十二支の四季配分は次の如くであるが、

春 寅, 卯

夏 午, 巳

土用 辰(陽), 未(陰), 戌(陽), 丑(陰)

秋 申, 酉

冬 子, 亥

この写本にも次文(第3葉裏)がある。

	口	辰	未	戌	丑
	伝	春	夏	秋	冬
		陽	陰	陽	陰

これと上文を比較すると、春の土用、夏の土用、秋の土用、冬の土用の配分十二支と陰陽であることが分る。また後文(第6葉表)に「王相死囚老之事」と題して、王位、相位、死位、囚位、老位の病氣其他の占文がある。

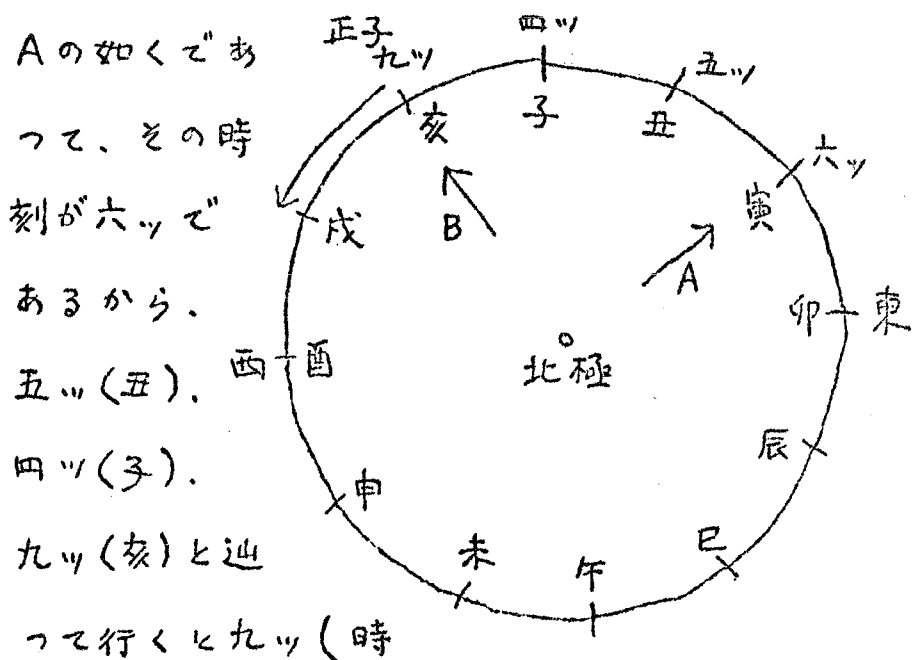
F.

次は「月建男」(第3葉裏)である。

正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子
十二										
丑										



これは建寅正月（雨水を含む月）であるから、夏曆である。建寅とは暮六ツ時には北斗の斗柄（ε, ρ, γ UMa）が寅の方向を向くことである。図の



Aの如くであ  
つて、その時  
刻が六ツで  
あるから、  
五ツ（丑）、  
四ツ（子）、  
九ツ（亥）と進  
つて行くに九ツ（時

刻の正子）には斗柄は亥の方向、図のBの如くである。かくして写本の「月時女」（第3葉裏）の次と比較すれば

- |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |
|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
| 正  | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 | 十 | 十一 |
| 亥  | 戌 | 酉 | 申 | 未 | 午 | 巳 | 辰 | 卯 | 寅 | 丑  |
| 十二 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |
| 子  |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |

これは言ってみれば、斗柄を時針とする恒星時の天然の星時計の目盛である。恒星の日周運動は東から昇り、西に落ちるのであるから、方位の十二支の順序とは逆な回転をする。つまり亥は正子刻であり、戌は丑時、酉は寅時……とすることとなる。(續く)

〔追記〕 この玉泉流之算は或いは算盤占の源泉ではないかと考へ、ソロバン占の文献はないものかと索し廻つて見たもの見当てる事は出来な  
いでいる。または玉泉流之算の異写本はないもの  
かと。

